

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：34406

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520196

研究課題名(和文) 演劇的知見を活かした実践型生涯活動のモデルプログラム策定に関する基礎研究

研究課題名(英文) A Basic Research on Designing Model Programs for Theatrical Lifelong Activities

研究代表者

椋平 淳 (MUKUHIRA, Atsushi)

大阪工業大学・工学部・教授

研究者番号：00319576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化・芸術活動の「公共性」が問い直されている時代情勢を受け、公共文化施設による一般市民に対する演劇的活動の提供事例(いわゆる「アウトリーチ」)を調査し、そうした事業がどのように社会の生涯活動推進に結びつくのかという点を考察するものである。活発な事業を展開している全国の公共文化施設を調査することによって、現代社会におけるアウトリーチ活動が踏まえるべき要点が抽出され、将来的に有効なプログラム・運営方法の骨格が提案できる段階に到達している。

研究成果の概要(英文)：In the fields of art and culture, the concept of "publicness" has been widely reexamined recently. This research investigates examples of theatrical projects for the public, so called "out reach," provided by public cultural facilities, and explores the possibility to promote theatrical lifelong activities through these outreach projects. Several facilities, which are famous nationwide for their active promotion of these kinds of theatrical activities, have been inspected and analyzed multilaterally, finding some key points to the fruitful outreach to propose preliminary drafts for effective outreach programs toward the future.

研究分野：芸術学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：演劇 アウトリーチ 市民参画 生涯活動 公共施設 公共性

1. 研究開始当初の背景

芸術活動の「公共性」が問い直されている現在、一般市民向けの参加型芸術的諸活動（いわゆる「アウトリーチ」）が、各地の公共文化施設やNPOなどの主催で実施されている。けれどもこうした事業は、概して芸術家側の視点に基づく取り組みの域を出ていない。この状況は、とくに演劇分野において顕著である。音楽や美術は、明治以来100年以上も義務教育に取り上げられてきた結果、学校教育さらには生涯活動の理論・実践との接合が比較的進んでいる。芸術振興という狭い意味ではなく、広く現代社会のコミュニティ形成に資する一要因として、演劇活動が理論づけられる学術的基盤はきわめて脆弱である。そのため、公共文化施設で推進される演劇的アウトリーチも、演劇関係者個人の経験則によって行われることがほとんどであり、学術的理論とその実践、およびその検証に基づく実効力のある活動が展開されているわけではない。

2. 研究の目的

本研究は、公共文化施設による一般市民に対する演劇的活動の提供がどのように一般社会の生涯活動推進に結びつくのかという点を学術的方法論によって再検討し、教育・福祉などより広い意味での文化的な社会生活構築に寄与するために、より有効な実践プログラム・運営方法を提案することを最終的な目的とした。

3. 研究の方法

(1) 日本各地で実施されている演劇的アウトリーチ活動の中で、調査・分析対象とする活動を、おもに次の3つに絞った。

・市民向けワークショップ

おもに一般市民を対象とし、文化施設に市民を集めたり、逆に文化施設から演劇関係者が他の会場に派遣され、ワークシ

ョップを行う。

・学校向けワークショップ

おもに学校に通う児童・生徒を対象とし、文化施設から派遣された演劇関係者が学校に出向き、当該学校の子どもたちにワークショップを行う。

・市民参画劇

企画によって、一般の大人か、あるいは子どものみ、または世代を横断した人々を公募などで募集し、演劇関係者がスタッフとして指導しながら舞台作品を創造する。

(2) 上記3つの事業活動を継続して行っている各地の公共文化施設・NPOなどを多数視察し、取り組みとして顕著な成果を上げている団体の中から、次の4つの事例に焦点を当てた。

・生活支援型文化施設コンカリーニョ（北海道札幌市）

・あさひサンライズホール（北海道士別市）

・可児市文化創造センター（岐阜県可児市）

・京都府立文化芸術会館（京都府京都市）

これらの施設・団体に関して集中的に現地調査するとともに、団体の担当者や事業を請け負う演劇関係者、また参加する一般市民や観客などから広範囲に意見聴取した。収集された資料の分析・考察に基づいて、現代社会におけるアウトリーチ活動が踏まえるべき要点を抽出し、将来的に有効なプログラム・運営方法の骨格をまとめた。

4. 研究成果

(1) 演劇的アウトリーチ諸活動の特徴

上記の3つの活動は、いずれも「公共施設が提供する演劇的活動を市民生活に浸透させる」、あるいは「演劇的活動を市民の生涯活動にとっての有力な受け皿とする」などの目的をもって実施されている。つまり、演劇を通じて市民生活の文化的豊かさを向上さ

せることが念頭にある。一方で、活動に参画してその公共施設に親近感を高めた一般市民が、参画した当該事業だけでなく他の各種催しの際にも、観客あるいは参加者として公共施設に足を運ぶ可能性が高まる効果もあり、「コアな顧客」を創出するという点で、公共施設のマーケティング手法としても重要視されている。その点で、上記3つの事業の中でとくに「市民参画劇」の製作は、主催者側と参加者側が同じ現場を共有する期間も長く、またそれによって相互の理解も重層的に深まるため、参加者側だけでなく主催者側にとっても充実感・達成感が高くなり、双方の期待にかなう成果が得られる可能性も増加する。また、残りの「市民向けワークショップ」「学校向けワークショップ」や、公共施設が提供する他の事業（参加型／鑑賞型かどうか、あるいは演劇ジャンルか否かを問わず）との総合的な連携も企てることが可能であり、各公共文化施設の事業展開の根幹として機能する潜在力も持っている。

したがって本研究では、最終的には「市民参画劇」を中心に、各公共文化施設における事業内容・運営手法を調査・分析した。以下に、主な調査対象施設の「市民参画劇」事業の概要と、それぞれの施設の他の事業との連携など、総合的な事業展開プログラムについての概略をまとめる。

(2) 生活支援型文化施設コンカリーニョ「温故知新音楽劇」

- ・主催：NPO 法人コンカリーニョ
- ・参加住民：札幌市西区に在住か勤務
- ・公演：2006 『とんでんがへし琴似浪漫』
07 『蝶よ、花よ～琴似新劇団物語～』
08 『オシャレな果実』
09 『明治琴似村冒険譚』
10 『噂、湯カゲン、イイかげん』
11 『旗ヲ出スベカラズ』

12 『シャッポおじさんの写真館』

13 『桑の実の色づく頃には』

- ・特徴：地域との密接な共生関係

札幌市琴似にあるこの施設は、NPO 法人コンカリーニョが管理・運営する客席 250 人規模の小劇場である。施設名が物語るとおり、この劇場は劇場活動と地域生活の接合を最重要課題に設定しており、「自由度の高い舞台芸術の創造拠点であると同時に、芸術文化を触媒として異分野・異世代の『縁むすび』を可能にし、まちとアートをむすぶコミュニティ拠点となる」ことをめざしている。

過去 8 年間継続している「温故知新音楽劇」事業では、劇場が立地する琴似地区にゆかりのテーマを作品の中心に据えている（たとえば、明治初期に屯田兵が歴史上初めて入地した土地であることなど）。それによって、この事業に対して、地域住民の関心を幅広い年齢層から呼び起こし、ひいては、劇場の存在自体に対する住民の理解を高めていくという成果につなげている。また、こうした事業趣旨は、NPO 法人コンカリーニョが提供する他の地域向け事業（「大生活骨董市」など）にも通底していて、この団体の活動展開における基本姿勢をなしている。コンカリーニョは 2009 年から、札幌市が所轄する「あけぼのアート&コミュニティセンター」の指定管理者に指定されているが、そうした実績も、この団体の活動成果や地域への波及効果が地元や自治体に受け入れられている証明だといえる。

(3) あさひサンライズホール「体験版 芝居で遊びましょ」

- ・主催：ARCH あさひ（市民を中心とした事業実施団体）
- ・参加住民：土別市 + 周辺地域
- ・公演：2004 『明日も陽だまりで』
05 『花の嵐団九郎一座』
06 『瞼の母』

- 07 『春はぼたもち』
- 08 『春日ノ原駅のこと』
- 09 『ホテル・トトロップへようこそ』
- 10 『ピピアンにあいたい』
- 11 『花火、舞い散る』
- 12 『境目に降る雪』
- 13 『グッバイ 父さん』
- 14 『君の先～友情と恋と未来に揺れる青春物語～』

・特徴：ホール年間事業や住民生活との有機的連関

北海道士別市朝日町のあさひサンライズホールは、士別市教育委員会地域教育課が管理・運営する 300 人規模の公共ホールである。2004 年以降毎年実施されている参加型市民劇製作事業「芝居で遊びましょ」は、市民参画劇の成功事例として全国的にも高く注目されている。

文化施設を求める地元住民の意向を受けて 1994 年に開館したこのホールは、他の公共施設にも見られる図書館・公民館だけでなく、冠婚葬祭に利用できるスペースもホール内に設けるなど、文化面のみならず地域生活全般とのつながりを念頭に設計されている。提供している事業についても、地域の特色を十分に考慮しつつ中・長期的な視野にもとづく管理・運営を心がけているため、単に文化事業を提供する機能だけでなく、住民生活と深く関わりながら地域の文化的豊かさを総合的に高めていく仕掛けにあふれている。

参加型市民劇製作事業「芝居で遊びましょ」は、そうした活動方針を具体化したこのホールの中核事業として、すでに 10 年以上継続して実施されている。たとえば、当事業を導入するまでに開館から 10 年が費やされている。その間は、演劇や音楽、落語などにいたるまで、各ジャンルにおける全国レベルの舞台公演鑑賞機会を住民に多数提供し、それによって参加型事業の実施に向けた住民

側の意識醸成を促している。そうした土壌の上に開始された当事業には、毎年 20～25 名程度の参加者が常に集結し、新陳代謝を繰り返しながら、延べ出演者はすでに 180 人程度に達している。一部の参加者は、年一回の公演に飽き足らずに独自の座組みをしてホールで公演したり、また舞台装置スタッフは、北北海道地域の他の公演スタッフも請け負う本職として会社を設立するなど、さまざまな形で波及効果が生まれている。現時点で当事業は、この地域の雪解けが始まる 3 月に開催されることもあり、一種の「春を告げる祭り」として住民の意識や生活に深く根づいている。

(4) 可児市文化創造センター「市民参加プロジェクト」

- ・主催：(公財)可児市文化芸術振興財団
- ・参加住民：岐阜県可児市 + 周辺地域
- ・公演：2009 可児市民ミュージカル『あい

と地球と競売人』

10 オーケストラで踊ろう！

11 音楽劇『地域の物語 わが町可児』

12 市民ミュージカル『君といた夏～スタンドバイミー可児～』

13 アーラ市民参加公演 オーケストラで踊ろう！『新世界』

14 大型市民参加公演『MY TOWN 可児の物語』

・特徴：社会貢献型劇場経営を掲げた複合的施策

岐阜県可児市の可児市文化創造センターは、公益財団法人可児市文化芸術振興財団の管理のもと、客席 1,000 人規模の主劇場、300 人の小劇場から、各種練習場・ワークショップルームなどを備えた総合的市民文化施設である。人口 10 万規模の小都市にありなが

ら、文化庁の「地域の中核劇場音楽堂」「特別支援劇場音楽堂」に採択されるなど、全国的に見ても顕著な実績を積み上げ、公立ホール成功事例として評価も高い。

この劇場の「市民参加プロジェクト」は、ミュージカル・ダンス・演劇の順に1年に1事業実施し、3年で1サイクルを循環させている。そのため、例年100人規模の多数の一般市民が参加しているが、毎年連続して参加する一部のコアな参加者を除いて、顔ぶれが固定化することがない。指導側に立つスタッフも一流のプロ(文学座など)を招き、また、高い技量のある劇場職員の万全なサポート体制も整っているため、作品の完成度も市民参加作品としては非常に優れており、出演者だけでなく観客にとっても高い満足感(経験価値)を提供する機会となっている。もちろん当事業は、事業としては単独なのだが、この劇場が提供している他のさまざまな住民向けサービス(ワークショップ、アウトリーチ、その他公演以外の各種事業)とも連動しつつ、一貫した運営方針のもとで実施されている。そのため、それぞれのサービスで劇場に親近感を持った顧客層が当事業に興味を覚えたり、同時に逆の作用も生まれたりしている。総じて、すべての事業が統合的に劇場と地元社会を効果的に結びつけ、地元企業や自治体との連携も促進されながら、文化的な社会貢献が広範囲に行われる結果となっている。

(5) 京都府立文化芸術会館「合同創作劇」「構成朗読劇」

- ・主催：京都府、(公財)京都文化財団(京都府立文化芸術会館) など
- ・参加住民：京都府内に在住か勤務
- ・公演：2002 『うたのまち』
 - 04 『ぼくの稲荷山戦記』
 - 06 『ちっちゃな太鼓の涙と』
 - 10 『京都で見つけた物語』

11 冬『京都で見つける、ちょっとした物語』

11 秋『京都で見つける物語』

- ・特徴：自治体提供事業としての性格満載

京都府立文化芸術会館は、京都府の所轄で公益財団法人京都文化財団等が管理している客席400人規模の多目的文化施設である。地方自治体が設置した施設としては、全国的に見てもかなり早く1970年に開館し、その後、民間の舞台関係者など専門の人材と協同しながら各種の事業を実施している。

当該事業は、この会館が35年間継続して実施している京都府等主催の演劇祭「Kyoto演劇フェスティバル」のプログラムの一部として導入されたものである。小学生から高齢者まで、毎回多数の参加者を集めて行われており、当初は「合同創作劇」として、また朗読が社会的ブームとなって以降は「構成朗読劇」と名称を変えて実施されている。とくに2011年度の事業は、文化庁主催の国内最大の文化祭典「第26回国民文化祭・京都2011」が京都府内で開催されたこともあり、その公式プログラムの一つとして位置づけられた。過去10年ほどにわたって企画・運営されてきた住民参加型舞台創作の総決算として、蓄積されてきたノウハウを最大限に活かした取り組みとなった。ただし、指定管理者制度など、公共施設の運営に関係する昨今の行政的事情などが複雑に絡み合い、将来的な展望が現時点では見いだせていない。とはいえ、11年秋の作品である『京都で見つける物語』の出演者・スタッフ・劇場担当者など、総勢50名を超える関係者からアンケートやインタビューなどの資料が得られており、今後の公立施設の事業展開を考えるうえで、きわめて有効な調査事例となっている。

(6) まとめ

以上の事例、および研究期間中に調査した

他の施設・事業に関するものも含めて、すべての調査内容を俯瞰してみると、おおむね次のような点が明らかになった。

一つ目は、各施設が実施している一般市民向け演劇的活動は、単に文化的要素だけではなく、経済的な地域の発展、あるいは少子高齢化時代の福祉のあり方など、現代社会のさまざまな論点が影響する分野である。そのため、実社会の展開と歩調を合わせ、さらには演劇的な取り組みによって社会をより良い方向に導いていくための知恵と工夫が求められる。

二つ目は、各施設にはそれぞれが基盤とする地元社会があり、文化的・経済的・地勢的などの複合的な要因がそれぞれに存在する。そのため、一口に「一般市民に対する演劇的活動」といっても、まったく同じ仕組み・運営方法をマニュアル的に取り入れることは困難である。したがって、参考となる先進的成功事例のエッセンスを正確に抽出し、そのポイントを各地域の固有の事業に的確に適合させる努力が求められる。

現代や将来の社会に「演劇的な生涯活動」が浸透し、また社会を発展させていく原動力となるには、少なくともこの2点に留意しつつ施策を打つことが必要だろう。

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

椋平 淳、住民参加劇と‘公共性’ 京都・琴似・土別、日本演劇学会近現代演劇研究会、2013年11月9日、大阪大学(大阪府)

椋平 淳、従来型公共ホールの活性化と地域の劇場化について、日本演劇学会、2012年6月17日、近畿大学(大阪府)

6．研究組織

(1) 研究代表者

椋平 淳(MUKUHIRA, Atsushi)